



ぶつぶつ放談

AI対話型ソフトChatGPTの可能性と浄土宗  
今岡達雄 鞆飼秀徳 小路竜嗣

江戸の街道探訪  
(最終回)

家康の全国道路網造り 奥州街道 森 清艦

微風吹動

誰もが好きな色を選べる場所 工藤量導

# 浄土

2023/5月号 目次

ぶつぶつ放談 対話型AIソフト ChatGPTの可能性と浄土宗 その1 ..... 今岡達雄 鶴飼秀徳 小路竜嗣	2
特別寄稿 崇源院ひとり語り(後編) .....	深川純子 11
寺々刻々⑩ 総裁を失った幸福の科学の行方 .....	鶴飼秀徳 20
林海庵・開教奮闘記⑨ 寄り添う(下) .....	笠原泰淳 24
漫画「浄土宗のお祖師様」三祖良忠上人⑳ .....	ぐんじまん 29
あなたもお寺のCIO⑬ LINE公式アカウントのバリアフリー化 ..... 小路竜嗣	32
微風吹動 誰もが好きな色を選べる場所 .....	工藤量導 36
江戸 日本の街道探訪 第24回(最終回)奥州街道4 ... 森 清鑑	40
編集後記 .....	48
心に響く言葉② .....	長谷川岱潤 表2



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙絵=貞林院瑞正寺二十五世 林錦洞「提」金文文字

アートディレクション=近藤十四郎

# 開教奮闘記

## 9 寄り添う(下)

林海庵開山上人

# 笠原泰淳



かさはら たいじゅん

昭和三十三年東京生まれ。慶応大学経済学部卒。日本通運(株)に入社。八年勤務し浄土宗東京教区貞源寺の故藤木芳清師に師事。佛教大学に学び、浄土宗僧階取得。東京教区心光院に約十年勤務。平成十四年「林海庵」を設立。翌年、同寺が浄土宗寺院として承認され住職となる。現在、浄土宗開教振興協会副理事長。

開教寺院に不可欠な「寄り添い」ということについて書いてきた。

あたたかい心で相手の心に耳を傾けること——それが要である。こちらが心を開けば、相手も心を開いてくれるかもしれない。

だが中にはこういう場合もある。

一時、高齢者の長期入院を受け入れている病院にボランティアで通っていたことがある。ベッドの脇で入院患者の話を聴いたり、時には洗髪後の髪にドライヤーをかけたりといった簡単なお手伝いをする。そこで看護スタッフに聞いた話だ。

その日の昼間、われわれボランティアの仲間が患者さんの脇で傾聴の活動をした。夜中になって、その患者さんが突然興奮してしまつて大変だつた、との事。昔のことをあれこれ思い出して興奮状態になられたらしい。傾聴、寄り添いが患者さんにとって良いことだったのかそうでないのか。それは分からない。だが少なくとも看護師たちにとつ

てはその日の夜中、大変だつたようだ。

もう一つ。これは相談者（話し手）に直接聴いた話だ。あるとき、相談員（聴き手）によく話を聴いてもらつて、ふだん話せなかつたことを随分たくさん話した。促されるままに、自分の深いところにある話を聴いてもらつた。だがふと気がつくくと、（心の）引き出しを次々と開けて中身を全部出してしまつたような感じだ。後になって、この出しつ放しの中身全部を一体どうしたら良いのか、途方に暮れてしまつた、というのだ。

だから、「今日はよく話を聴けた」と思つても、それが相手にとって本当に良かったのかどうかは分からない場合もある。

人間の心は本当に複雑だ。

一方、ときには聴き手の側をケアしてもらう必要もある。傾聴のために自分の心を開いた状態にするということは、つまりは傷つきやすくなる

いうことだ。相談者の中には攻撃的な態度をとる人もいたり、対応が難しい人もいる。つい話が長くなって、聴いている方がヘトヘトに疲れることもある。聴き手が疲弊し過ぎてしまっただけはない。

寄り添い・傾聴という文脈でなくとも、寺院を運営していると色々なことがある。寺院運営上の悩みや、檀信徒から無理な要求をされて嫌な思いをしたり、親しく支えて下さったお檀家の葬儀を悲しみを堪えて勤めなければならなかったり、また自身の家族のことで思い悩むこともある。(寄り添ってもらいたいのはこっちの方だ)と思うときもある。そうした聴き手側、われわれ教師側を癒すのは何だろうか。休息、旅行、趣味、家族団欒? 勤行やお念仏が一番という人もいるだろう。だがもつとも効果的なのは、やはり人に傾聴してもらうことだと思う。自分の内面を言葉に出してみる。それを誰かにしっかりと受け止めてもらう。

そこで新たな感覚が生まれる。その感覚を確かめながら、少しずつ前に進む。

だが、私たちが相談したいと思ったときに秘密を守ってくれる相談先はあまりないのではなからうか。

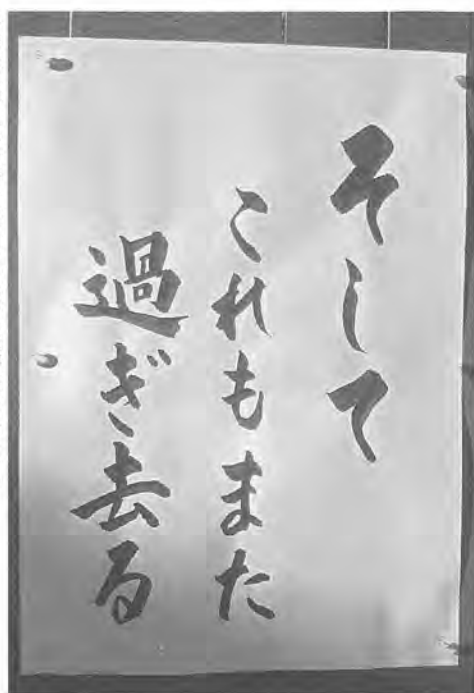
絶対に秘密が守られるような相談制度を、教区単位で作っても良いのかもしれない。門葉の寺院を大切にすることが、檀信徒を大切にすることにつながる。ひいてはそれが宗門の発展につながる。そうではないだろうか。

そうした中で、檀信徒の中から自死者を出さない、という目標を掲げて全国の浄土宗寺院で協力して取り組んでみたらどうだろう(すでにそういう活動をされている方もおられると思う)。目標が具体的であるからこそ、スキルアップの研修もできるし事例のシェアも可能だろう。門葉の寺院に対して上の方から「寄り添いが大事」というばかりでなく、一宗、あるいは教区みずから各寺

院に「寄り添う姿勢」をまず示さなければならぬ。そうして初めて、各寺院に社会貢献への取り組み意欲が湧いてくるのではないか。

これは批判ではなく、提案である。

開教寺院においては、相談に見えるのは菩提寺のない方が多い。まれに他寺院の檀信徒が見える



林海庵には笠原住職の筆による書の掲示が貼られている

こともある。気持ちに寄り添うことも大事だが、特に仏事相談の場合は状況を正確に把握することも大切だ。

初対面であれば、まず宗派の確認からだ。林海庵を「わが家の宗派と同じ」だと思つて来寺されるのだが、実は他宗派だったということがよくある。多いのが浄土真宗や曹洞宗との混同。曹洞宗は「そうとう」の音が「じょうど」と似ているからであろう。ご先祖の戒名を伺ったときに初めて浄土宗でないことが分かることもある。次に多いのが西山派や時宗との混同。

宗派を気にしないという方も多くなってきた。だが少なくとも、宗派による戒名の違いは伝えなければならぬ。

「宗派は別に気にしませんので、これから林海庵さんでお願いできませんでしょうか。」

「それは…構いませんが、もしうちからお戒名をお授けするようなことになれば、浄土宗のお戒名

になりますよ。」

「えっ 違うのですか。」

「はい。(真宗は『釈』号、西山派は『空』号、時宗は『阿』号『式』号で浄土宗はかくかくしかじかで……。)それで皆さん宜しいのであれば、うちでお付き合ひさせて頂きます。」

次に菩提寺の有無を確認する。墓地はすでにあるのか、あるいはこれから求めるのか。郷里のお墓は誰が守っているのか。菩提寺はないとお宅が決めていても、実はお寺の方はお宅を檀信徒と認識しているのではないか。寺報や行事のご案内が郵送されてきてはいないか。

もし菩提寺があれば、当然その寺檀関係を第一に考えなければならぬ。開教寺院としては、既存の寺檀関係がより緊密になるようにサポートをする。

そしてお仏壇の有無。お仏壇があるのであれば、どういふご先祖をお祀りしているのか。

ご経験のある方も多いたろうが、檀信徒宅のお仏壇の前に坐ると、そのお仏壇に日々丁寧にお参り頂いているかどうかがすぐに分かる。中にはミリ単位で計測して、仏具をきっちり左右対称に並べているようなお仏壇もある。

また、よく手入れされた古いお仏壇でも、阿弥陀さまを祀っていない場合がある。阿弥陀さまを祀っていても、その真前にお位牌があつて阿弥陀さまが全く見えなくなっていることも。

「ちよつとお仏壇の中の配置を動かしても良いですか。」

許可を得てお仏壇の中身を全部出させてもらい、新たに並べ替えることもたびたびだ。

相手の気持ちに寄り添うこと、そして浄土宗教師としての的確なアドバイス。

それがまさに、私たち僧侶に求められていることではないだろうか。